

旧関東州における展覧会制度

江川佳秀

現在の日本人が「満洲」という言葉から思い浮かべる地理的な範囲とは、かつて遼東半島にあった日本の租借地関東州と、その奥に広がっていた日本の傀儡国家満洲国をあわせた地域とほぼ重なるのでないだろうか。しかし、戦前の日本人にとっての「満洲」は、時代とともに少しずつ変化していたと思われる。

大まかにいって第1の段階は、旧関東州と満鉄沿線に点在する奉天や長春、哈爾濱などの都市である。1905(明治38)年に締結したポーツマス条約の結果、日本は遼東半島南端部の租借権と、南満洲鉄道会社(以下、満鉄と呼ぶ)の経営権を獲得した。それ以降日本人の移住が本格化し、関東州と沿線各地に日本人社会が形成されていった。この時期の日本人にとっては、遼東半島南端と満鉄沿線の都市が実感をもってとらえることができる「満洲」の範囲だったと思われる。その周辺に広がる茫漠たる大地は、匪賊が跋扈する未明の地だった。

第2の段階は、現在の日本人が思い浮かべるのと同じ旧関東州と旧満洲国とあわせた地域だろう。1932(昭和7)年3月に旧満洲国が「建国」されると、新天地を求めて海を渡る日本人が急増した。たまたま筆者の手元にあった統計をひもとくと、「建国」からの6年9ヶ月後の1938年(昭和13)末の時点で、すでに旧関東州に約18万人、旧満洲国に約52万2千人の日本人が暮らしている。そして旧関東州は中華民国からではなく旧満洲国からの租借地とされ、旧満洲国との一体化が強力に推し進められていた。旧関東州と旧満洲国はひとつながりの場所だった。

第3の段階は、1937(昭和12)年以降の状況である。この年、日本は旧満洲国の西部に国境を接する一帯に、蒙疆聯合委員会(後に蒙古聯合自治政府)と、中華民国臨時政府(後に王兆銘政権と合流)という二つの傀儡政権を樹立した。第二の満洲国ともいえる政権で、直後から日本人の移住が始まっている。満洲と蒙古をひとまとめにした「満蒙」という言葉自体は前の時代からあったが、この時期はことさら満洲とこの一帯を指す言葉として用いられた。日本人の意識の上で、「満洲」の地理的範囲が拡大していたのだと思える。

2009(平成21)年11月7日に豊田市美術館で開かれたシンポジウム「日本近代における東アジア表象」で、筆者は戦前の中国東北部に暮らした日本人美術家たちが現地で開いた展覧会の変遷を、この3つの段階に分けて報告した。第1の段階の展覧会は、植民地という特有の気風を漂わせながら、それでも大筋で日本の一地方画壇の活動に外ならない。第2の段階では、旧満洲国の国防国家としての性格を色濃く反映し、展覧会活動でも統制が押し進められていた。第3の段階では大東亜共栄圏という理念の下、展覧会も「日滿支」提携の一端を担うこととなった。

本稿では、この3つの段階のうち、第1の段階に旧関東州で開かれた主要な展覧会の概略を紹介しておこうと思う。日本人美術家の展覧会活動が本格化した1920年代から30年代にかけて開かれた展覧会と、その余韻ともいべき展覧会である。第2の段階に旧満洲国で開かれた展覧会は、部分的であるがすでに別稿で紹介した¹⁾。また、完全に満洲国の文化統制に組み込まれた1941(昭和16)年以降の関東州の展覧会と、第3

の段階の展覧会については、いずれ別の機会に紹介したい。

なお、あらかじめお断りしておくことがある。ひとつは文中で用いる用語である。文中では「新京」(現、長春)や「満洲国」(旧満洲国、偽満洲国家)といった当時の日本人が用いた呼称を、括弧や注釈を添えずにそのまま用いることがある。これらの呼称が正当性を欠くことは論をまたないが、記述の混乱を避けるためであって他意はない。

もうひとつは、本稿がきわめて不十分な資料をもとにしているということである。戦前現地の日本人社会で刊行された文献は、戦後の混乱の中で決定的に失われている。筆者が目にすることができた出品目録や展覧会図録はきわめて少ない。そのため多くは現地で刊行された新聞や雑誌の記事から復元を試みたが、それも難しい展覧会が少なくない。主要な展覧会を見落としている可能性もある。あくまで調査の経過報告とご理解いただきたい。

¹拙稿「満洲国美術展覧会をめぐる」『昭和期美術展覧会の研究 戦前編』東京文化財研究所 平成21年4月 pp.183-216

満洲美術展覧会(満鉄美術展覧会)

満鉄社会課が主催し、「美術の民衆化」と「満洲に於ける美術趣味の向上」を目的に開催した¹。1923(大正12)年から1924(大正13)年の間に3回開かれた²。満鉄は沿線住民のための福利厚生事業として音楽会や料理講習会などを行っていたが、そのひとつだった。それまでも関東州や満鉄沿線各地では、散発的に小規模な展覧会が開かれていたが、ある程度の規模と継続性を持った展覧会はこれが最初だった。

展覧会を発案し、実務を取り仕切ったのは、満鉄社会課嘱託の洋画家三井良太郎である。三井は白馬会葵橋研究所に学び、同研究所で幹事を勤めたあと、1916(大正5)年に大連に渡った。当初大連で洋画研究所を主宰していたが、1922(大正11)年から満鉄嘱託となり、各地で洋画講習会や小規模な展覧会を開いた³。満洲美術展覧会は各地で開かれた展覧会の中央展といった位置づけがあったらしく、第3回展はあらかじめ各地で展覧会を開き、それを受けて最後に開かれた⁴。また、各地で開かれた小規模な展覧会のひとつである撫順美術展覧会の規定には、満洲美術展覧会で2等賞以上の受賞者は無鑑査で処遇するという規定があった⁵。

第1回展は、第1部(東洋画)、第2部(西洋画)、第3部(彫刻)、第4部(工芸美術、参考品)の4部門を設けた。第4部の参考品とは古美術品である。出品目録によると、第2部の出品者には萬鐵五郎と林倭衛の名前がある。萬は、審査員のひとり眞山孝治と面識があったので⁶、その縁で作品が並んだのかもしれない。

第2回展は、当初10月中旬の開催を予定していたが、9月1日に関東大震災が発生したため、11月に延期された⁷。この回から第1部(東洋画)、第2部(西洋画)、第3部(彫刻)の3部門となった。また、大連のあと奉天に巡回した。この回は大連にあった美術グルー



第3回満洲美術展覧会(満鉄美術展覧会)ポスター
図案は眞山孝次

ブ曠原社と三井との間に反目があり、審査員の辞退など混乱があったという⁸。
 第3回展は、前回の反省から曠原社を交えた会合で要項と展覧会委員を決めた⁸。また、
 初めて審査員を日本から招聘することとし、朝鮮美術展覧会の審査のため朝鮮半島ま
 で渡る藤島武二と小室翠雲に依頼した。しかし藤島は都合により長原孝太郎と交替し⁹、
 小室は展覧会関係者との感情的な行き違いがあって大連に到着してから辞退した¹⁰。
 1925(大正14)年は大連勸業博覧会美術館が開かれ、第4回展は中止された²。以降、
 開かれることはなかった。

■第1回

会期：1923(大正12)年2月23-27日

会場：大連・満蒙文化協会

主催：満鉄社会課

委員長	牧野虎次	(満鉄社会課長)
委員	築島信司	
	他5名	
鑑査員(東洋画)	仁林聾仙	
鑑査員(東洋画)	石田吟松	
鑑査員(西洋画)	谷山静生	
鑑査員(西洋画)	三井良太郎	
鑑査員(参考品)	八木装三郎	
審査委員長	梅野實三	(満鉄理事)
審査員(東洋画)	仁林聾仙	
審査員(東洋画)	石田吟松	
審査員(西洋画)	谷山静生	
審査員(西洋画)	眞山孝次	
審査員(西洋画)	三井良太郎	
	他	
幹事	築島信司	
	他	
顧問	上田恭輔	
顧問	梅野 實	註 ¹¹

出品点数：

	第1部(東洋画)	第2部(西洋画)	第3部(彫刻)	第4部(工芸美術・参考品)
応募	170点		不詳	不詳
入選	32点	53点	不詳	57点
鑑査員、 審査員他作品	7点	11点	不詳	不詳
展示計	39点	64点	5点	57点

註¹²

■第2回

会期：1923(大正12)年11月21-27日

会場：大連・大倉ビルディング

主催：満鉄社会課

会期：1923(大正12)年12月7-12日

会場：奉天公会堂

主催：満鉄社会課

審査委員長 牧野虎次 (満鉄社会課長)
 審査委員 中尾萬三
 審査委員 眞山孝次
 審査委員 山脇信徳
 審査委員 武石莊美
 審査委員 河南 拓
 審査委員 谷山静生(義毅)
 審査委員 仁林聳仙
 審査委員 石田吟松
 審査委員 三井良太郎 註¹³

出品点数：

	第1部(東洋画)	第2部(西洋画)	第3部(彫刻)
応募	157点		不詳
入選	31点	45点	不詳
(内1等)	(一)	(一)	(一)
(内2等)	(1点)	(1点)	(一)
(内3等)	(4点)	(2点)	(一)
(内賞状)	(2点)	(4点)	(一)
審査委員作品	(6点)	(9点)	(一)
展示計	92点		

註¹⁴

授賞

第1部(東洋画)

1等 足立芳香 《微風》
 3等 伊藤順三 《春酣》
 3等 高橋好子 《廟》
 3等 齋藤 徳 《世相二態(飢餓)》
 3等 圓川歌女 《蘭》
 賞状 高木古泉 《吉林の鯉》
 賞状 龍田長治 《山陰朝暎》

第2部(西洋画)

2等 二階英夫 《秋近し》
 3等 重松むら 《静物》
 3等 早水 巖 《農家》
 賞状 白銀義雄 《小川》
 賞状 中川道之 《奉天郊外》
 賞状 稲葉好延 《廟》
 賞状 羽室長靖 《郊外雨晴》 註¹⁵

■第3回

会期：1924(大正13)年6月7-15日(7日は招待日)

会場：大連・大倉ビルディング
 主催：満鉄社会課

会期：1924(大正13)年6月27-29日

会場：奉天公会堂

主催：満鉄社会課

審査員 長原孝太郎 (藤島武二から交替)
 審査員 小室翠雲 (辞退)
 委員長 中尾萬三
 委員(西洋画) 眞山孝次
 委員(西洋画) 谷山静生
 委員(西洋画) 河南 拓
 委員(西洋画) 三井良太郎
 委員(西洋画) 山脇信徳
 委員(西洋画) 徳永吾七郎
 委員(西洋画) 武石莊美
 委員(日本画) 石田吟松
 委員(日本画) 仁林聾仙
 委員(日本画) 伊藤順三
 委員(日本画) 澤村習古
 委員(批評家) 渡邊 巖
 委員(批評家) 古閑 亮
 幹事 二瓶治夫 註¹⁶

出品点数：

	第1部(東洋画)	第2部(西洋画)
応募	30余点	130余点
入選	不詳	不詳
(内満鉄賞)	(1点)	(2点)
(内褒状)	(3点)	(6点)

註¹⁷

授賞

(東洋画)

満鉄賞 足立芝香 《晚香玉》 安東
 褒状 平高遙象 《支那美人》 大連
 褒状 龍田長治 《山の夕》 大連
 褒状 阿佐美庄三郎 《冬の朝》 大連

(西洋画)

満鉄賞 中川道之 《晩春の奉天病院附近》 奉天
 満鉄賞 山道榮助 《郊外の春》 沙河ロ
 褒状 笹森清一郎 《幸子像》 大連
 褒状 二階英夫 《支那街》 安東
 褒状 庄司 眞 《夕景》 奉天
 褒状 三宅安子 《静物》 新義州
 褒状 泉 保藏 《山東人》 遼陽
 褒状 山城竹次 《大連風景》 沙河ロ 註¹⁸

- ¹「満鉄社会課で美術展覧会 二十三日から五日間 満蒙文化協会で」『満洲日日新聞』1923年2月3日(朝刊) p.1
- ²浅枝青句「美術十年史」『満洲芸文年鑑 康徳9年度版』満洲富山房 1943年11月 p.13
- ³「三井良太郎年表」『三井良太郎遺作集』同刊行会 1938年9月 p.6
- ⁴「目下計画中にある満鉄美術展覧会 沿線各地を手始めに」『満洲日日新聞』1924年1月10日(朝刊) p.2
- ⁵「炭鉱庶務課主催の撫順美術展覧会」『満洲日日新聞』1924年2月25日(朝刊) p.5
- ⁶萬鐵五郎「菊坂研究所の思出」『みづゑ』第247号(1925年9月号) p.46
萬が白馬会菊坂研究所に通っていた頃、眞山が研究所の幹事だった。
- ⁷「満洲の美術展 第二回は十月開催」『満洲日日新聞』1923年5月31日(朝刊) p.2
「美術展覧会 十一月下旬開催」『満洲日日新聞』1923年10月21日(朝刊) p.2
- ⁸浅枝次朗「満洲美術界の今昔」『満蒙』第48号(1924年7月号) pp.148-151
- ⁹「長原孝太郎氏 藤島氏の代わりに満展審査員」『満洲日日新聞』1924年6月1日(夕刊) p.3
- ¹⁰橋三衛「小室翠雲氏に与ふ」『満洲日日新聞』1924年6月8日(夕刊) p.2
- ¹¹「満鉄社会課で美術展覧会 二十三日から五日間満蒙文化協会で」(前掲書1)
「花に魁けて 満洲で初めての美術展覧」『満洲日日新聞』1923年2月23日(夕刊) p.1
- ¹²「花に魁けて 満洲で初めての美術展覧」(前掲書11)
浅枝次朗「満洲美術界の今昔」(前掲書8)
- ¹³「満鉄の美術展覧会 社会課の主催で」『満洲日日新聞』1923年10月26日(朝刊) p.2
- ¹⁴「審査を終へた満展 昨年と比し傑作が多い 愈々二十一日から開催」『満洲日日新聞』1923年11月18日(夕) p.2
「満展愈々蓋明け 陳列点数九十二に上り前回よりも格段の進境」『満洲日日新聞』1923年11月21日(朝) p.2
「愈々蓋を明けた第二回美術展覧会 観覧者殺到の大景気」『満洲日日新聞』1923年11月22日(朝) p.2
- ¹⁵「審査を終へた満展 昨年と比し傑作が多い 愈々二十一日から開催」(前掲書14)
- ¹⁶「満展委員顔触 委員長には中尾萬三氏」『満洲日日新聞』1924年5月8日(夕刊) p.3
「長原孝太郎氏藤島氏の代りに満展審査員」(前掲書9)
橋三衛「小室翠雲氏に与ふ」(前掲書10)
浅枝次朗「満洲美術界の今昔」(前掲書8)
- ¹⁷「満展近づく 作品出揃つた明日鑑査発表」『満洲日日新聞』1924年6月4日(夕刊) p.2
「第三回の満展で受賞した作品 満鉄賞を獲た人々」『満洲日日新聞』1924年6月12日(朝刊) p.2
- ¹⁸「第三回の満展で受賞した作品 満鉄賞を獲た人々」(前掲書17)

全満漫画展覧会

満洲日日新聞社の事業として開かれ、一般から公募した作品を展示した。現地の著名人や世相に取材した風刺漫画の展覧会だったが、展覧会の賛助員や委員、出品者には現地の美術家たちの名前がある。曠原社もこの年3月の例会で、「出来るだけ出品及援助をなす事」¹と決めていた。会場は「未来派や表現派張りのものから屏風半切色紙短冊とさながら現代世界美術界の縮図」だったという²。

会期：1924(大正13)年4月25-27日

会場：大連・三越呉服店

主催：満洲日日新聞社

賛助員	丘 襄二
賛助員	横井實郎
賛助員	高柳保太郎
賛助員	田村羊三
賛助員	辰見銀二

賛助員	中尾萬三	
賛助員	村岡樂童	
賛助員	山脇信徳	
賛助員	今 景彦	
委員	二瓶治夫	
委員	渡邊 巖	
委員	中溝新一	
委員	河南 拓	
委員	谷山靜堂	
委員	山城竹治	
委員	眞山孝治	
委員	三井良太郎	
委員	石田吟松	註 ³

出品点数：不詳

¹「文芸美術 曠原社三月例会」『満洲日日新聞』1924年3月13日(夕刊) p.3

²「係員を面喰はせた未来派や表現派の絵 今日から三日間三越呉服店で開かれる漫画展覧会」『満洲日日新聞』1924年4月25日(朝刊) p.2

³「全満漫画展覧会開催」『満洲日日新聞』1924年3月22日(夕刊) p.3

大連勸業博覧会美術館(現代美術の部)

大連市の新市政施行を記念して開かれた大連勸業博覧会の一部として開かれた。博覧会は7部門に分かれ、第1部から第6部では農林水産業や鉱工業を紹介し、第7部の美術品は「美術館」として紹介された。美術館の展示は「現代美術」「古代美術」「参考品」に分かれ、「現代美術」はさらに「第1科 東洋画」「第2科 西洋画」「第3科 彫刻」「第4科 工芸美術」「第5科 芸術写真」に分けられていた¹。

当初、審査のための鑑査委員を選任したが²、その後見直しがあり、無審査で出品を受け付けることとした³。実務は満鉄を退職して博覧会美術館主事に就任した三井良太郎が担当した⁴。曠原社も積極的に企画にかかわったらしく、曠原社が各方面に出品を勧誘している⁵。

美術館の開催にあわせて、会場内や大連市内、旅順市内で関連の企画が催された。会場内に設けられた美術館附属展覧会では、骨董商組合や建築協会、曠原社、遼東写真光会、小森忍の倣古陶器などの展示があった⁶。旅順市内の旅順博物館に設けられた「美術館」では、古美術品や現代日本美術、旅順名産の工芸品などが展示された⁷。大連市内の満蒙文化協会では、博覧会分室として支那現代画家作品展覧会が開かれた⁸。

会期：1925(大正14)年8月10日-9月18日

会場：大連語学学校

美術館委員	中尾萬三	
美術館委員	高柳保太郎	
美術館委員	田村幸三	
	他23名	註 ⁹
委員(東洋画)	伊藤順三	



『大連勸業博覧会 美術館 記念秀作集』満洲写真通信社 1925年8月

委員(東洋画)	石田吟松	
委員(東洋画)	澤村修古	
委員(東洋画)	仁林聿仙	
委員(西洋画)	眞山孝治	
委員(西洋画)	谷山静生(義貌)	
委員(西洋画)	山城竹二	
委員(西洋画)	河南 拓	
委員(西洋画)	三井良太郎	
委員(彫刻)	常木庄藏	
委員(工芸)	小森 忍	
委員(芸術写真)	不詳	註 ¹⁰

出品点数：

	第1科 (東洋画)	第2科 (洋画)	第3科 (彫刻)	第4科 (工芸美術)	第5科 (芸術写真)	
一般作品	32点	79点	1点	-	不詳	
委員作品	4点	7点	1点	8	不詳	
計	36点	86点	2点	8	不詳	註 ¹¹

- ¹「美術館の陳列方法」『満洲日日新聞』1925年7月11日(夕刊) p.2
²「大連博 美術審査委員顔触れ決定」『満洲日日新聞』1925年7月7日(夕刊) p.2
³「大連博審査委員 各部門に置く」『満洲日日新聞』1925年7月10日(夕刊) p.2
⁴「三井良太郎年表」『三井良太郎遺作集』同刊行会 1938年9月 p.6
⁵「美術出品勧誘」『満洲日日新聞』1925年7月11日(朝刊) p.4
⁶「大連博 博覧会の申込多し」『満洲日日新聞』1925年7月18日(朝刊) p.2
⁷「パノラマは一三三日頃 美術館は十日から 旅順市の準備もすつかり整ふ」『満洲日日新聞』1925年8月9日(夕刊) p.2
「財津騎獅子の像」『満洲日日新聞』1925年8月12日(朝刊) p.3
「旅順の美術展覧会 廿日頃から公開する」『満洲日日新聞』1925年8月14日(朝刊) p.3
⁸「博覧会の分室として支那現代画出陳 紀伊町の文化協会で」『満洲日日新聞』1925年8月22日(夕刊) p.2
「満蒙文化資料展覧会」『満蒙』第6年11号(1925年9月号) pp.124-125
⁹「美術館委員」『満洲日日新聞』1925年7月5日(夕刊) p.2
¹⁰委員の名簿は、下記の2つの文献に差違がある。「大連勸業博覧会美術館陳列目録」に従った。
「大連勸業博覧会美術館陳列目録」『大連勸業博覧会美術館 記念秀作集』満洲写真通信社 1925年8月 pp.1-9
「大連博 美術審査委員顔触れ決定」(前掲書2)
¹¹「大連勸業博覧会美術館陳列目録」(前掲書10)

旅大素人書画展覧会

大阪毎日新聞大連支局の開設1周年を記念して開かれた。旅順と大連の居住者が、出品物を持ち寄って公開した。展示は「自作品ノ部」と「参考作品ノ部」に分かれ、前者には自作の書画を、後者には各自が所蔵する書画、古典籍などを展示した。「自作品ノ部」には、大連の主要な画家であった伊藤順三、石田吟松なども出品している¹。展覧会に際して制作された出品目録は、この時の展示を第1回としているが、2回目以降が開かれたかどうかは不明。



『旅大素人書画展覧会紀念帖』
大阪毎日新聞社大連支局 1926年5月

■第1回

会期：1926(大正15)年5月9-11日

会場：大連・大毎館

主催：大阪毎日新聞大連支局

発起人総代	杉野耕三郎	(大連)
発起人	大藏公望	(大連)
発起人	安藤又三郎	(大連)
発起人	立川卓堂	(大連)
発起人	田岡淮海	(大連)
発起人	中尾万三	(大連)
発起人	村井啓太郎	(大連)
発起人	佐藤至誠	(大連)
発起人	荒木天空	(大連)
発起人	中村敏雄	(大連)
発起人	丘 襄二	(大連)
発起人	井上常太郎	(大連)
発起人	大來修治	(大連)
発起人	竹内坦道	(大連)
発起人	高塚源一	(大連)
発起人	寶性確成	(大連)
発起人	李文權	(大連)
発起人	廣瀬道幹	(旅順)
発起人	平石氏人	(旅順)
発起人	津田元徳	(旅順)
発起人	内堀維文	(旅順)

出品点数：

自作品ノ部	参考出品之部	註 ¹
165点	237点	

¹「第一回旅大素人書画展覧会目録」『旅大名士書画展覧会記念帖』大阪毎日新聞社大連支局 1926年5月 n.p.

満鉄洋画展覧会

満洲美術展覧会(満鉄美術展覧会)が途絶えたあと、1926(大正15)年になって開かれた。満鉄社員倶楽部が主催し、満洲洋画会会員の作品と、一般から公募した作品を展示した¹。満洲美術展覧会(満鉄美術展覧会)との関係や、満洲洋画会の詳細は不明。現地紙の記事は、この年の展覧会を第1回としているので、翌年以降も継続する見込みがあったと考えられるが、現状は確認ができていない。

■第1回

会期：1926(大正15)年11月11-15日

会場：大連・満鉄社員倶楽部

主催：満鉄社員倶楽部

出品点数：

応募	163点(66人)	
入選	89点(25名)	
会員作品	77点(31名)	
その他	8点	
展示計	174点	註 ²

¹「夥しい出品 満洲洋画展 明日から」『満洲日日新聞』1926年11月10日(朝刊) p.3

²「夥しい出品 満洲洋画展 明日から」(前掲書1)

「満洲洋画展 印象に残る絵の数々」『満洲日日新聞』1926年11月13日(夕刊) p.7

満洲美術家協会(第1次)展覧会

満洲美術家協会は1929(昭和4)年2月末頃に結成され¹、同年5月に第1回展を、翌年5月に第2回展を開いた。1934(昭和9)年に結成された同名の組織と区別するため、(第1次)と付記する。日本画や洋画、彫刻、工芸など分野を越えた作家が、関東州だけでなく奉天、長春、哈爾濱など満鉄沿線各地から参加した。「全満美術家大同団結の最初の展覧会」だった²。会員作品を公開した展覧会であり、一般からの公募はなかったと思われる。

それまで関係者の間では、同じく日本の旧植民地であった朝鮮や台湾と比較して、満洲の状況が話題になっていたらしく、この展覧会の発足は関係者の期待を集めた。現地紙の記事は、「朝鮮台湾に於ける両総督府主催の鮮展台展に匹敵すべき展覧会」としている³。

1931(昭和6)年以降は、現状では開催の記録が見あたらない。満洲美術展(中日文化協会)が始まったため、休止した可能性がある。また、満洲美術家協会の組織が存続したかどうかは定かでない。

■第1回

会期：1929(昭和4)年5月24-28日

会場：大連・三越呉服店

主催：満洲美術家協会

出品点数：

	日本画	洋画	彫刻	
展示計	約100点		2点	註 ⁴

■第2回

会期：1930(昭和5)年5月10-14日

会場：大連商工会議所

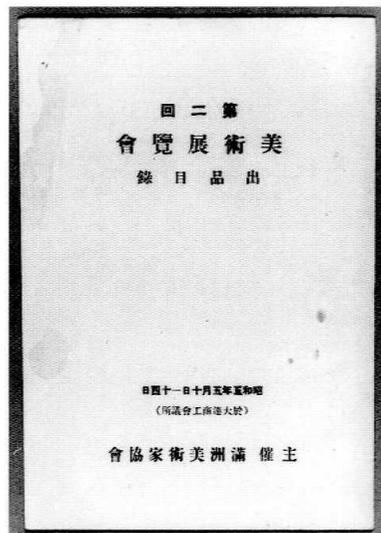
主催：満洲美術家協会

出品点数：

	日本画	洋画	彫刻	
展示計	105点			註 ⁵

¹大野斯文「満一歳」『満洲日報』1930年5月12日(夕) p.4

²「満洲美術家協会の第一回展覧会 来る廿四日三越にて」『満洲日報』1929年5月18日(朝刊) p.2



『第二回美術展覧会出品目録』満洲美術家協会 1930年5月10日

³『満洲美術展覧会』『満洲日報』1929年5月23日(朝) p.6

⁴「けふから五日間 満展開かる 全満をすぐた作品に賑ふ 出品画百点に達す」『満洲日報』1929年5月25日(夕) p.2

『『鶏』常木庄藏氏作』『満洲日報』1929年5月30日(朝) p.6

⁵『第二回美術展覧会出品目録』満洲美術家協会 1930年5月10日

「満洲美術家展 大連商議で開会以来おほ賑ひ」『満洲日報』1930年5月12日(朝刊)

出品点数は『第二回美術展覧会出品目録』による。なお、この文献は、全出品作品を「絵画」としているが、「満洲美術家展 大連商議で開会以来おほ賑ひ」によると、その中に「和、洋画、及び彫刻」が含まれていた。

満洲美術展覧会(中日文化協会展)



第1回満洲美術展覧会(中日文化協会展)会場風景
『満蒙』第12年12号(1931年12月号)

中日文化協会(1932年から満洲文化協会に改組)が主催し、1931(昭和6)年10月に第1回展を、1932(昭和7)年10月に第2回展を開いた。中日文化協会は「満蒙の文化開発と該地方在住民共同の福利を増進」することを目的に、出版、展覧会、講演会などの事業をおこなっていた¹。この展覧会の他にも、中日現代美術展覧会²や満洲写真美術展覧会³など各種の展覧会を開いている。

展覧会は満洲全域を対象とし、日本人だけでなく中国人作家を参加させることを目指していたと考えられる。しかし第1回展は、9月18日の柳条湖事件を発端に満洲事変が勃発したため、満鉄沿線からの出品が芳しくなかった。旅大からの出品も、事情は不明だが少なかったという⁴。また、中国人作家の出品を促すために設けた中国画部門の入選は5作家25点にとどまった。出品作家の圧倒的多数を占めたのは日本人作家だった⁵。

満洲国「建国」後に開かれた第2回展は、新たに満鉄地方部地方課が共同主催者となり、満洲国文教部が後援した。また、「満洲国祝賀の意味も含ませて」⁶、大連での終了後、満洲国側の奉天と新京に巡回した。奉天、新京では、「日満親善を図る意味から」⁷日中の関係者を集めた座談会が開かれた。

1933(昭和8)年には第3回展を予定していたが、新たに満洲国で発足した満洲美術同人院展覧会に吸収され、中止された⁸。

■第1回

会期：1931(昭和6)年10月25-28日(24日は招待日)

会場：大連商工会議所

主催：中日文化協会

評議員・特別会務委員	新木秀郎	(大連)
評議員・特別会務委員	伊藤順三	(大連)
評議員・特別会務委員	石田吟松	(大連)
評議員	大野斯文	(大連)
評議員	大橋貞一	(大連)
評議員・特別会務委員	河野青陶	(大連)
評議員	紙谷豊太郎	(大連)
評議員	甲斐巳八郎	(大連)
評議員	金井章次	(大連)
評議員	金井廣彰	(大連)
評議員・特別会務委員	桑山哲舟	(大連)
評議員	笹森清一郎	(大連)
評議員	阪本治一郎	(大連)

評議員	杉野一湧	(大連)	
評議員	外河武夫	(大連)	
評議員	辰巳銀二	(大連)	
評議員	永原鐵治	(大連)	
評議員・特別会務委員	平島 信	(大連)	
評議員・特別会務委員	藤山一雄	(大連)	
評議員・特別会務委員	山城竹次	(大連)	
評議員・特別会務委員	福田義之助	(大連)	
評議員	石田貞藏	(大連)	
評議員	池田季藏	(旅順)	
評議員	津田元徳	(旅順)	
評議員	塚本 孝	(旅順)	
評議員	鳥原集一	(旅順)	
評議員・特別会務委員	宮本芳柳	(旅順)	
評議員	溝田 豊	(旅順)	
評議員	坂本 高	(旅順)	
評議員	小倉圓平	(奉天)	
評議員	河南 拓	(奉天)	
評議員	佐藤 功	(安東)	
評議員	柴田 正	(長春)	
評議員	山内忠三郎	(哈爾濱)	註 ⁹
銓衡委員	津田		
銓衡委員	阪本		
銓衡委員	新木		
銓衡委員	河野		
銓衡委員	石田		註 ¹⁰

出品点数：

	第1部(日本画)	第2部(中国画)	第3部(西洋画)	計
応募	89点	40点	243点	371点
入選	35点	25点	121点	171点
特別出品等	不詳	不詳	不詳	11点
展示計	不詳	不詳	不詳	182点

註¹¹

授賞

奨選(日本画)	木本八重	《ゆく夏》	(鞍山)
奨選(日本画)	石田 茂	《支那部落》	(大連)
奨選(西洋画)	小田原留一	《花園の秋》	(大連)
奨選(西洋画)	伊藤金藏	《静物》	(大連)
奨選(西洋画)	渡邊隆二	《静物》	(大連)
奨選(西洋画)	川上草子	《夏家河子風景》	(大連)
奨選(西洋画)	石川三次郎	《金魚》	(大連)
奨選(西洋画)	濱野長生	《野菊》	(大連)
奨選(西洋画)	境野一鞆	《室内》	(大連)
奨選(西洋画)	奥行 雄	《森》	(大連)
奨選(西洋画)	井田 幸	《高田馬場附近》	(大連)
奨選(西洋画)	久留島鼎	《星ヶ浦風景》	(大連)

奨選(西洋画) 本田平八郎 《ポプラと家》 (鞍山) 註¹²

■第2回

会期：1932(昭和7)年10月28-31日(27日は招待日)

主催：満洲文化協会、満鉄地方部地方課

後援：満洲国文教部

会場：満洲日報社講堂

会期：1932(昭和7)年11月5-7日

主催：満洲文化協会、満鉄地方部地方課

後援：満洲国文教部

会場：奉天ヤマトホテル

会期：1932(昭和7)年11月9-10日

主催：満洲文化協会、満鉄地方部地方課

後援：満洲国文教部

会場：奉天省教育会(奉天城内元宮殿聴劇場)

会期：1932(昭和7)年11月19-20日

主催：満洲文化協会、満鉄地方部地方課

後援：満洲国文教部

会場：新京西広場小学校

評議員・鑑査委員(東洋画)	伊藤順三
評議員・鑑査委員(東洋画)	石田吟松
評議員・鑑査委員(東洋画)	甲斐巳八郎
評議員・鑑査委員(西洋画)	平島 信
評議員・鑑査委員(西洋画)	山城竹次
評議員・鑑査委員(西洋画)	境野一靱
その他評議員	[不詳]

註¹³

出品点数：

	第1部(東洋画)	第2部(西洋画)	計
応募	89点	314点	403点
入選	35点	152点	187点
特別出品	不詳	不詳	不詳
展示計	不詳	不詳	不詳

註¹⁴

¹「社団法人中日文化協会規約摘要」『満蒙』第12年第10号(1931年10月号) p.174

²—記者「中日現代美術展」『満蒙』第10年第11号(1929年12月号) pp.112-115

³「満洲写真美術展覧会」『満蒙』第11年第11号(1930年12月号) p.169

⁴福田義之助「所感及洋画部に就て」『満蒙』第12年第12号(1931年12月号) p.152

⁵「入選者発表 三部で百七十一一点」『満洲日報』1931年10月23日(朝刊) p.7

⁶「満洲展期待さる 搬入締切は二十四日」『満洲日報』1932年10月15日(朝刊) p.7

⁷「美術を通じて日滿親善座談会 第二回満洲展を機会に」『満洲日報』1932年11月16日(夕刊) p.5

—記者「満蒙座談会から」『満蒙』第13年第12号(1932年12月) pp.148-152

⁸「積土に穿くむ秋のサロン 大連美術展覧会」『満洲日報』1933年10月13日(朝刊) p.7

「社説 満洲国美術独立の為に」『満洲日報』1933年11月23日(朝刊) p.2

⁹「満展を終りて」『満蒙』第12年第12号(1931年12月号) p.144

¹⁰「締切迫り續々搬入」『満洲日報』1931年10月17日(夕刊)p.2

¹¹「入選者発表 三部で百七十一人」(前掲書5)

「満展けふから蓋開け 好評の画風別の陳列」『満洲日報』1931年10月25日(夕刊)p.2

なお、下記文献によると、応募、入選の点数は下表のとおりとなる。ここでは仮に新聞報道の点数を採用した。

「満展を終りて」(前掲書9)

	第1部(日本画)	第2部(中国画)	第3部(西洋画)
応募	41点	15点	165点
入選	35点	不詳	111点

¹²「満展を終りて」(前掲書9)

「満洲美術展 奨選発表」『満洲日報』1931年10月27日(朝刊) p.2

¹³「満洲展査査員」『満洲日報』1932年10月4日(夕) p.2

¹⁴「協会記事 第二回満洲美術展覧会」『満蒙』第13年12号(1932年12月) p.176

同文献によると、この他に「満洲画」5点の応募があったという。なお、下記文献によると、搬入、入選の点数は下表のとおりとなる。ここでは仮に「協会記事 第二回満洲美術展覧会」の点数を採用した。

「満展蓋明け 本社樓上・けふ招待日」『満洲日報』1932年10月28日(夕)p.2

	第1部(東洋画)	第2部(西洋画)
応募	89点	318点
入選	36点	155点

大連美術展覧会

1933(昭和8)年、大連での開催が予定されていた第3回満洲美術展覧会(中日文化協会)が、新京で開かれる満洲美術同人院展覧会に吸収される形で中止になると、このことに反発した大連の美術家たちが、急遽大連美術同好会を組織して開催した。無審査で出品を受けつけた。満洲美術展覧会の主催者だった満洲文化協会は、「後援」という形で展覧会にかかわった¹。

五果会、黄塵社、白虹会、商業美術協会など、大連の主要な美術グループがこぞって参加し、満鉄沿線各地からも「傍観にたへず」作品が集まった²。会場は「満洲大サロンに相応しき内容」となったという³。

会期：1933(昭和8)年11月24-27日(23日は招待日)

会場：大連商工会議所

主催：大連美術同好会

後援：満洲文化協会

発起人 竹中(満鉄理事)

発起人 石村誠一

発起人 丘 襄二

他 註¹

出品点数：

	東洋画	西洋画	計
展示計	30点	175点	205点

註³

¹「籍土に芽くむ秋のサロン 大連美術展覧会 美術愛好家により来月末に開催さる」『満洲日報』1933年10月13日(朝)p.7

²「大連美術展 二十三日は招待日 二十四日から一般公開」『満洲日報』1933年11月22日(朝刊) p.7

³「力作を網羅し大連美術展」『満洲日報』1933年11月24日(朝)p.7

満洲女流美術協会展覧会

満洲女流美術協会は、1934(昭和9)年8月頃、大連で結成された。創立会員は木村光枝、深松琴子、廣田秀蘭、成瀬香園、松田清子、草野榮子、柴田柳美子、瀬戸君子の8人と、二瓶等観や平嶋信が大連で主宰していた洋画研究所の女性研究生たちである¹。主義主張よりも、作家たちの交友関係で結びついた団体だった。同年9月から1940(昭和15)年9月までの間に7回の展覧会を開いたことが確認できる。展覧会ごとに一般からの作品を公募した。出品者の資格は、「満州在住の女子に限る」としていた²。第1回展の時点は40名の会員を擁していたが³、第5回展の時点は11人まで減少している⁴。新聞などの記事も次第に少なくなり、衰退していった様子がうかがえる。しかし、1940(昭和15)年に新京婦人美術協会が誕生する⁵までは、ある程度の規模と継続性を持った女性の美術団体は、この団体が満洲で唯一の団体だった。

■第1回

会期：1934(昭和9)年9月15-17日

会場：大連・三越ホール

出品点数：

	油絵	日本画
応募	計約100点	
会員作品		
展示計	70点	

 註⁶

■第2回

会期：不詳

会場：不詳

出品点数：不詳

■第3回

会期：1936(昭和11)年9月1-3日

会場：大連・三越ギャラリー

出品点数：

	油絵	日本画
応募	不詳	
会員作品		
展示計	60点	

 註⁷

■第4回

会期：1937(昭和12)年9月1-3日

会場：大連・三越ホール

出品点数：

	油絵	日本画
応募	不詳	
会員作品		
展示計	50点	

 註⁸

■第5回

会期：1938(昭和13)年9月2-4日

会場：大連・三越ホール

出品点数：

	油絵	日本画	
応募	不詳		
会員作品			
展示計	50点		註 ⁹

■第6回

会期：1939(昭和14)年9月1-5日

会場：大連・三越ホール

出品点数：不詳

■第7回

会期：1940(昭和15)年9月

会場：大連・三越ホール

出品点数：不詳

- ¹「満洲婦人美術家協会生る」『満洲日報』1934年8月4日(朝刊) p.4
²「満洲女流美術会第一回展開催」『満洲日報』1934年8月24日(朝) p.4
³「三越の展覧会二つ」『満洲日報』1934年9月16日(朝) p.7
⁴「女流美術展」『満洲日日新聞』1938年9月1日(夕刊) p.4
⁵「エプロン姿で美術と取り組む 新京に誕生した婦人美術協会」『満洲日日新聞』1940年11月29日(朝刊) p.8
⁶「満洲女流美術会第一回展覧会」『満洲日報』1934年9月14日(朝) p.4
 「三越の展覧会二つ」(前掲書3)
⁷「大連女流美術展 愈々けふから三越で」『満洲日日新聞』1936年9月1日(朝刊) p.5
⁸「女流美術展」『満洲日日新聞』1937年9月1日(夕刊) p.4
 「女流美術展」『満洲日日新聞』1937年9月2日(朝刊) p.5
⁹「女流美術展」『満洲日日新聞』1938年9月1日(夕刊) p.4

満洲美術家協会(第2次)展覧会

満洲美術家協会は、1934(昭和9)年9月、大連の洋画家たちが中心になって結成され¹、同年11月から1936(昭和11)年11月までの間に3回の展覧会を開いた。

第1回展は、一般から作品を公募したかどうか定かでない。結成から間がなかったことを考えると、会員の作品だけを展示したのでなかったかと思える。第2回展からは作品を公募し、会員が審査にあたった。

展覧会には、前衛的な作家からアカデミックな作家まで、大連の主要な作家がこぞって参加した。その背景には、文化活動に限らず、全ての中心を大連から新京に移そうとする満洲国の政策に対抗する必要上、関東州の作家が結集せざるを得なかったという事情があったと考えられる。前年には、従来大連で開かれていた満洲美術展覧会(中日文化協会展)が、新たに新京で開かれた満洲美術同人院展覧会に吸収され、中止になるという出来事もあった。



第2回満洲美術家協会展覧会(第2次)審査風景

このことと表裏をなすことだが、満洲国からの参加者は少なかった²。「満洲」と名のつてはいたが、実態は大連の地方美術団体に近かったのでないと思われる。1935(昭和10)年の第2回展に際して開かれた会員たちの座談会でも、満洲国側の奉天美術協会や新京美術協会と、合同で展覧会を開く構想が語られている³。

第3回展の直前には、「前衛派一団」が脱退するという出来事があった⁴。分裂の背景は明らかでない。脱退した作家たちは新たに満洲美術聯盟を結成した。第3回展は残った会員18名によって開かれたが、その後主要メンバーであった松原省吾の死去や、今井一郎の新京への転居などが重なり⁵、自然消滅したようだ。第4回展以降は活動の形跡が見あたらない。

■第1回

会期：1934(昭和9)年11月4-8日

会場：大連・満洲日報社講堂

出品点数：

展示計	107点	註 ⁶
-----	------	----------------

■第2回

会期：1935(昭和10)年11月8-12日

会場：大連・満洲日日新聞社講堂

審査会員 山城
 審査会員 久留島
 審査会員 植原
 審査会員 二瓶
 審査会員 吉武
 審査会員 杉野
 審査会員 川上
 審査会員 河野

出品点数：

搬入	154点	
入選	58点	
会員作品	40点	
展示計	98点	註 ⁷

■第3回

会期：1936(昭和11)年11月3-7日

会場：大連商工会議所

審査員 全会員(出席12名、欠席6名) 註¹

出品点数：

搬入	101点	
入選	66点(32名)	
会員作品	40点	
展示計	106点	註 ⁸

¹「美術」『昭和十一年 康徳三年 満洲年鑑』満洲日日新聞社 1935年11月 p.566

²稲葉亨二は、第1回展の会期中に『満洲日報』に投稿した記事で、「今後満洲国人の作品をも更に出品させたい」としている。

稲葉亨二「満洲美術家協会展について(下)」『満洲日報』1934年11月9日(朝刊) p.4

³「満洲美術展 合評会(六)」『満洲日日新聞』1936年11月16日(朝刊) p.7

⁴「色彩の秋を飾る 力作集まる満洲美術展覧会」『満洲日日新聞』1936年11月1日(朝刊) p.7

⁵江内豊「満洲美術界に望む(中)」『満洲日日新聞』1937年1月23日(夕刊) p.4

⁶稲葉亨二「満洲美術家協会展について(下)」(前掲書2)

⁷「満、台人も交る珠玉の五十八点 珍しく活気を呈した厳選に満洲美術展あす蓋開け」『満洲日日新聞』1935年11月8日(夕刊) p.2

⁸「満洲美術展公募作品 入選州二名発表」『満洲日日新聞』1936年11月2日(朝刊) p.7

満洲美術聯盟展覧会

満洲美術聯盟は、1936(昭和11 康徳3)年10月頃¹、満洲美術家協会(第2次)を脱退した38名の画家によって、大連で結成された。五果会をはじめ、満洲郷土色研究会や満洲女流美術協会などのメンバーである。発足にあたっての声明は、「画壇の政治工作に行き悩む封建思想を一蹴し」「真の芸術研究に純粋な制作行動を採つて以て社会芸術の密接不可分を勉強したい」としていた²。同年11月と翌年11月に、2回の展覧会を開いた。しかし、結成から約半年経った1937(昭和12)年になって、満洲郷土色研究会を母体に誕生したパンブタオ集団の画家たちが退会した³。退会の事情は明らかでない。展覧会を牽引し、会場で人目をひいたのは五果会のメンバーだった。新聞の報道は、ことさらシュルレアリスムやキュビズムなど五果会の前衛的な作品に注目している⁴。第2回展は同年11月に開いたが、第3回展は予定していた1938(昭和13)年秋になって中止を発表し⁵、それ以降活動を停止した。

■第1回

会期：1936(昭和11)年11月21-23日

会場：大連・満鉄社員倶楽部

出品点数：

会員作品	60点余	註 ⁶
------	------	----------------

■第2回

会期：1937(昭和12)年11月5-7日

会場：大連・満鉄社員倶楽部

出品点数：

会員作品	55点	註 ⁷
------	-----	----------------

¹江内豊「満洲美術界に望む(中)」『満洲日日新聞』1937年1月23日(夕刊) p.4

²「満洲美術聯盟 初の展覧会」『満洲日日新聞』1936年11月21日(夕刊) p.2

³三井正登「満洲美術連盟展評(上)」『満洲日日新聞』1937年11月9日(夕刊) p.4

⁴「満洲美術展 社員クラブで」『満洲日日新聞』1936年11月23日(夕刊) p.7

⁵「消息 満洲美術聯盟」『満洲日報』1938年10月13日(夕) p.4

⁶「満洲美術聯盟初の展覧会 あすから開催さる」『満洲日日新聞』1936年11月21日(夕刊) p.2

⁷「第二回満洲美術聯盟展」『満洲日日新聞』1937年11月6日(夕刊) p.4

大連日本画家連盟展覧会

大連日本画家連盟は、1937(昭和12)年春に結成された。同年7月には大連の画家たちが行った献画運動に参加し、国防献金席画会を開いている¹。10月には連盟の展覧会を開き、皇軍戦捷大祭にあわせ「戦捷」にちなんだ作品を展示したというが²、その後の活動は不明。翌年5月に結成された大連日本画協会との関係も不明である。

■第1回

会期：1937(昭和12)年10月16-18日

会場：大連・天野ギャラリー

出品点数：不詳

¹「美術」『昭和十三年康徳五年 満洲年鑑』満洲日日新聞社 1937年11月 p.373,412

²「戦捷に因む日本画展」『満洲日日新聞』1937年10月15日(夕刊) p.4

大連日本画協会展覧会

大連日本画協会は、1939(昭和14)年5月伊藤順三、甲斐巳八郎、石田吟松、金井廣章、山脇成志、岡田練石、吉武孝、外河武夫、伊藤素石、宮本柳芳、阿佐見庄三郎、永原鐵治、伊藤陽二の13名によって結成された¹。1939(昭和14)年2月に第1回展を開いたことが分かるが²、詳細は不明。

■第1回

会期：1939(昭和14)年2月16-21日

会場：大連・三越

出品点数：不詳

¹「大連日本画協会の結成」『塔影』第15巻6号(1939年6月号) p.56

²「大連日本画協会第一回展」『塔影』第16巻3号(1940年3月刊) p.59

新興満洲美術協会展覧会

新興満洲美術協会は、1939(昭和14)年春、畑本一夫、二瓶等観、武田一路、樫原健三、大森義夫、福田義之助、藤坂太郎の7名によって結成された。二瓶や樫原、大森、福田は穏当な写実を基調とした画家で、文展や帝展にも出品していた。1936(昭和11)年に五果会などの作家が満洲美術家協会(第2次)を脱退して満洲美術聯盟を結成したときは、満洲美術家協会(第2次)に残った。新興満洲美術協会の結成を伝えた新聞記事は、「聖戦下の満洲美術向上を目指して今春創立せられた」「時局下にふさはしきリアリズムの確立に邁進せんとする意気が窺へる」としている¹。

現地で刊行された年鑑の記事は、「春公募展を開き、秋会員展を開く」としている²。この記載どおり、1939(昭和14)年は6月に第1回展を公募展として開き、11月に同人小品展を開いている。1940(昭和15)年7月の3回展は、資料がほとんどないが、やはり一般からの作品を公募したのだろう。それ以降は展覧会に関する報道が見あたらないので、早晚解散にいたったと考えられる。

■第1回

会期：1939(昭和14)年6月4-8日

会場：大連・三越

出品点数：

	第1部(日本画)	第2部(洋画)
応募	計85点	
入選	計18点	
(内受賞)	(1点)	(3点)
会員作品	計約30点	

註³

第1部(日本画)

受賞 杉山恒子 《桃》

第2部(洋画)

受賞 福富 新 《女の像》

受賞 加賀見常造 《初夏の午後》

受賞 松山幸子 《風景》 註⁴

■第2回(秋季同人小品展)

会期：1939(昭和14)年11月13-16日

会場：大連・三越

出品点数：

	日本画	洋画
会員作品	不詳	

■第3回

会期：1940(昭和15)年7月23-27日

会場：大連・三越

出品点数：不詳

¹「新興満洲美術協会第一回展」『満洲日日新聞』1939年6月4日(夕刊) p.4

²「団体並に定期展」『昭和十六年 康徳八年 満洲年鑑』満洲日日新聞社 1940年12月 p.456

³「新興満洲美術協会第一回展」(前掲書1)

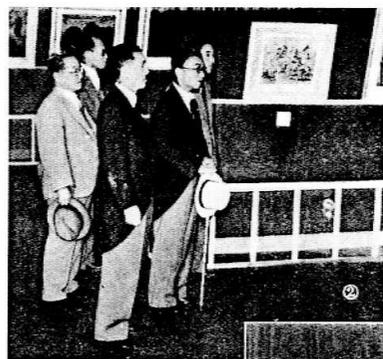
⁴「消息 新興美術展入選者」『満洲日日新聞』1939年6月8日(夕刊) p.4

⁴「消息 新興美術展入選者」(前掲書3)

紀元2600年奉讃関東州美術総合展覧会

紀元2600年の奉祝行事として開催された。展覧会の会長に大連市長をいただき、役員には官界、財界の要人が就くなど、公的な色彩を濃厚に帯びた展覧会だった。また、審査員には日本から山口蓬春と中山巍を招き、展覧会の権威付けの面でも、従来の関東州では例を見ない展覧会だった¹。

そのためか、関東州の美術界で指導的な立場にあった作家から、中堅、若手の作家まで、関東州の主要な作家がことごとく参加している。受賞者の選考でも同列に扱われている¹。この時期、日本国内だけでなく満洲国でも美術界の挙国一致体制の確立が模索されていたが、奉祝行事という名の下に、それが実現した展覧会だったといえるだろう。



紀元2600年奉讃関東州美術総合展覧会会場風景
『昭和十六年 康徳八年 満洲年鑑』満洲日日新聞社
1940年12月

会期：1940(昭和15)年6月19-23日

会場：大連・三越

後援：満洲日日新聞社

会長 別宮秀夫 (大連市長)
副会長 浦 (関東庁内務部長)
副会長 首藤 定 (大連商工会議所副会頭)
顧問 三浦直彦 (関東州庁長官)
顧問 中西 (満鉄理事)
顧問 高田 (大連商工会議所会頭)
顧問 貝瀬 (大連市会議長)
顧問 松本豊三 (満洲日日新聞社長)
審査員(第1部) 山口蓬春
審査員(第2部) 中山 巖
準備委員 10数名 註¹

出品点数：

	第1部(日本画)	第2部(西洋画)
応募	計181点	
入選	13点	82点
(内長官賞)	(1点)	(1点)
(内市長賞)	(-)	(1点)
(内満鉄総裁賞)	(-)	(1点)
(内満日社長賞)	(-)	(1点)
(内推奨)	(-)	(5点) 註 ¹

第1部(日本画)

長官賞 岡田錬石

第2部(西洋画)

長官賞 三井正登

市長賞 福田義之助

満鉄総裁賞 市村 力

満日社長賞 濱野正義

推奨 山城竹次

推奨 平島 信

推奨 大森義夫

推奨 濱野長正

推奨 高橋 勉 註¹

¹『美術界一年』、『昭和十六年 康徳八年 満洲年鑑』満洲日日新聞社 1940年12月 p.455

(えがわ・よしひで 徳島県立近代美術館学芸課長)